

神隠し

大島 行雲

来なかった。いくら待っても来なかった。

遅刻常習犯の彼ではあったが、一時間以上も現われなかった事など今まで一度としてない。携帯電話には電源が入ってるらしいが、何度かけても出ない。家の電話も同じだ。

女は途方に暮れた。勿論、怒っている。わざわざ、恋人に会う為に広島までやって来たというのに、当の相手が待ち合わせ場所に現われないなど全く失礼な話だ。元々、会いたいと言ってきたのは彼の方なのに。遠距離恋愛を続けている以上、どちらが先に言い出そうが、お互い会いたいと思うのは当たり前ではあったが。

今日は日曜で、彼の仕事は休みだ。休日出勤など就職以来、一度たりともないという、或る意味、幸福な職場で働いている。それなのに、なぜ、現われないのか。何やら心配になってくる。待ち合わせ場所に来る途中、交通事故にでも遭ったのだろうか。ともかく、アパートに行ってみる事にした。

呼び鈴を押そうとして気づく。新聞受けに二つの新聞が入ったままになっていた。今朝の新聞、それに昨日の新聞だ。彼は毎日、きちんと新聞を読む性格だから、どこか外泊でもしない限り、起こり得ない事だった。となると、途中で交通事故に遭

ったのではない。いや、帰る途中で事故に遭ったのかもしれない。それとも、具合が悪いのか。電話に出られないくらい衰弱しているのか。

慌てて呼び鈴を押す。反応はない。何度も押す。反応はない。

女は、どうにも途方に暮れた。残念ながら彼の部屋の合鍵までは持っていない。独身者ばかりのアパートで近所付き合いないという話だから、隣室の住人に聞いても何も分からないだろう。いや、聞くだけ聞いてみよう。駄目で元々だ。

隣室の呼び鈴を押す。反応はない。何度も押す。反応はない。左も右も二部屋とも留守らしい。どうしたものか。

迷った末、彼の実家に電話をかけた。二人の付き合いを知ってはいるが、会った事はない。母親が出た。いつも明るくて親しげに彼女に話をしてくれる人だ。事情を話すと、何も聞いていないと言う。声心配そうな色を帯びている。調べてみて電話すると言われ、それを待つ事にした。

アパートの前にある小さな駐車場の隅に腰掛けて、彼の部屋の窓を見上げる。白いバススタオルが一枚、干してあった。一体、いつから干されたままなのだろう。

暫く待つと、携帯電話に連絡が入った。

出たのは彼でも、彼の母親でもない。男の声だった。彼の父親だ。嫌な予感がした。案の定、両親が知る限りの彼の友人や職場の同僚に聞いてみたところ、誰も何も知らないと言う。部

屋に入って調べた方が良さそうだが、それにはアパートの貸主の承諾を得なければならぬので、もう暫く待つてほしいと言う。

女は本当に途方に暮れた。携帯電話を握り締め、彼の部屋の窓を見上げる。白いバスタオルが秋風にはためいていた。

その後、部屋の鍵を開けてもらって調べてもらおうとしたところ、益々、事態は不可解になっていった。中でチェーンがかかっていたのだ。中に誰かいると思っただけで、声をかけても返事は無い。心配した拳銃、チェーンを切断して中に入ったものの、彼も誰もいなかった。窓にも鍵はかかっていた。

台所には洗い終えた食器が置かれ、携帯電話がアダプターに嵌められたままになっていた。着信履歴には今日、彼女が何度もかけた電話の前の二日前に待ち合わせの確認の為に彼女がかけた電話が記録されているだけで、その間には一つもない。元来、彼女との連絡以外には殆ど電話を使わない人だった。CDラジカセには、彼が好きだった浜崎あゆみのアルバムが入ったままで、電源が付けっ放しになっていた。部屋の照明も付けっ放しだ。洗面台の床には脱ぎ捨てられた彼の衣服があっけ、浴室の照明も付けっ放しだった。

浴室には水が満たされ、浴槽の縁にタオルがかけられていた。そして、洗い場に場違いな物が落ちていた。苺だ。洗面器、石

鹸、シャンプーやリンスと一緒に、季節外れの苺が一個、排水口の横に転がっていた。